環境創造シンポジウム　パネルディスカッション要約

[パネリスト自己紹介]
開沼氏
震災前から福島の社会学的研究をしている。先日、県内で元気に活動している方々とディスカッションの機会があったが、既に「風評」を通り越してこだわっていない人々だった。

佐々木氏
震災の時は会津地方振興局に勤務、大熊町等からの避難者を支援。汚染廃棄物の処理促進等の調整を担当していた。

関氏
二本松でななくさ農園をしている。子供が 7 歳と 4 歳。イギリスで触発され、自分も有機農家をやりたくなった。平成 18 年に夫と農林水産省を辞めて二本松に移住した。きゅうり、インゲン、トマトを作っている。夫が楽天的なので、自分も原発事故をあまり気にせずにこれた。

塚田氏
大学を卒業して以来、30 年以上にわたり環境放射能を研究している。主に放射性物質の土から農作物への移行を調べている。2012 年から福島大学、2014 年から環境放射能研究所に勤務。

住吉氏
平成８年にNHKアナウンサーの初任地が福島だったので県内の方々を取材をしてまわった。伊達の霊山町の里山学校とは 20 年のつきあい。震災直後は、NHK を辞める前にひたすら安否確認の放送をした。

玄侑氏
近所の「住職」なのでここに居続けるのが仕事。最近、「竹林精舎」という作品を出版した。福島県に移住してきた若い住職が主人公で、檀家さんとどう付き合うかが一大事で、放射線がメインテーマではない生活を描いた。

[ふくしまの未来について]
開沼氏
福島は「悲劇の地」のようにもっていきたがる空気もあるが、それを乗り越えた人も、そこで止まったままの人もいる。この状況を表す新しい言葉をみつけていきたい。

①これからの放射能との関わり、②守り伝える美しいふくしま　のテーマですすめていく。まず、①について、放射線の理系的な理解に限らず、感じ方受け止め方も含めて。

［第一部これからの放射能との関わり］

玄侑氏

人間にとっての環境のうち最大は重力、次が自律神経。自律神経の働きのうち、呼吸は意思でコントロール可能。放射線に比べ、呼吸はけた違いに大きな活性酸素の発生源になる。放射線の弱い場所に移住するよりは、呼吸を整えたほうが活性酸素を減らせる。

佐々木氏

環境創造センターは福島県、JAEA、国環研の三機関で構成。モニタリング、調査研究、情報収集発信、教育研修交流を担う。調査研究は５１テーマ。山火事調査では放射性物質の飛散・流出による影響は現時点では認められなかった。三機関連携協力して調査継続中。

住吉氏

県外から見ていて、廃炉が遅々として憤りを感じる。40 年というのは人生の半分の時間。生活者として、放射線のことは背景として生きていくということ。

放射線のことは考えすぎ気にしすぎたストレスのほうがむしろ悪影響があるのはそうだろう。霊山町の方々も春は山菜を食べたいといって食べている。この状況で生きていくということ。

塚田氏

基礎研究がすぐ社会に反映されるという事例はあまり多くないが、前から研究していた成果が事故後活用されるようになった。伊達市小国で地元の人々に初めて土壌からコメへの放射性セシウムの移行について説明した際、学会等とは全く違う緊張感をよく覚えている。小国の試験栽培米のセシウムは 2011 年に 500Bq/kg だったが対策等によって低下した。研究成果は解釈を加えわかり易く理解しやすいようにして一般の方に還元する、更に猟友会や中学生なども含めた地元の方々にもお知らせしている。小国の人々と長いつきあいになり今や福島の故郷になっている。2012 年から大熊町でも試験作付をしているが、やはり対策等によって基準値を下回るようになった。

大気圏核実験によりどこの土壌であっても放射性セシウムは存在し、事故前から 100Bq/kg を超える天然キノコを採取し、それを食していた。線量の高い帰還困難区域の動植物を調査しているが、長期間にわたり放射能の影響を見極める必要がある。

関氏
私のななくさ農園は山木屋とは山を挟んで反対側にある。こんな時だからこそ前に進もうと、発泡酒作りを始め、続いて 8 人の仲間とワイナリーも始めた。有機野菜を作って千葉に出荷していたものの、事故後やがて買ってもらえなくなったが、福島県内の店で置いてもらえるようになった。学べる場をつくろうと、教室もやっている。

（質問紙回収時間）
玄侑氏（風評について）
「来て」という県のポスターはがっかり、県外に哀願する必要はないだろう、来たければ来ればいい、というプライドがほしい。分かってくれる人とつきあえばいいではないか。そもそも人生は風評の中にいるようなもの、誰からも正しく理解されて生きている人などいない。（風評を気にするのは）もう、無駄な努力をしなくていいんじゃないですか。

開沼氏
どういうメッセージを出すか難しくなっている。わかりたい知りたいという人とじっくり話したい、7 年経ってもわかってくれない人は仕方ないと思うこともある。とはいえコミュタンのような施設があるので学んでほしい。

[第二部　守り伝える美しいふくしま]
開沼氏
除染のような放射能の問題もあれば、震災前からの福島だけではない問題もある。それぞれが福島の環境にできることをお話しください。

住吉氏（情報発信として）
日本の他の地域と同じく、少子高齢化が問題。福島の自然は里山であって住む人がいてこそ。人の魅力、人と人とが知り合って感動することが大事。都会に疲れ田舎に移住したい需用はあるが、住み続けられる雇用が必要。

関氏
放射線だけではない、過疎化が問題。農水省時代に、ずっと生活していけるサステナブルであることを重要だと考えた、農業に興味をもってくれる若者に「ここでやっていけるんだよ」というところを見せたい。

塚田氏
福島大学の研究室からの四季の写真を見ると人里と里山が近い。自然と人が密に接している。豊かな自然の中での活動を取り戻せるようにしたい。

佐々木氏
猪苗代湖の水環境の保全に関する研究と猪苗代水環境センターを紹介。

開沼氏
水がおいしいと米や酒もおいしい。川や湖の美しさも打ち出していきたい。

****
Q&A：聴講者からの質問票の一部に対してパネリストが回答した。
関西の友人に福島のことをどう伝えたらいいか

住吉氏
自分の中でフィルターを通して、当事者の視点・気持ちを欠かさないように、誰かを傷つけていないか考えている。

玄侑氏
（関西の友人が福島の放射能を恐れるなら）別に来なくていい。事故前 2002 年に全国 14 万 9 千箇所の測定で線量を調べた長瀬ランダウアのデータでは、年間 1mSv 以上が 11 県あった。
いま、放射線を福島だけの問題にしようとしている。富山県で線量が上昇していて大陸からの影響が考えられるが、表に出ない。

開沼氏
寄り添いたい一方で、一定の知識がないとコミュニケーションが成り立たないという指摘だったかと思う。すべてのパネリストから回答いただく時間が無くなり申し訳ない。